

2018 年度(平成 30 年度)

学校関係者評価委員会

入学してくる学生の出身校の内訳はどういうものでしょうか。

->

工芸高校から半分から上の割合で、以外は造形系の美術等を専攻している学生。総合学科などで美術を専攻した学生。普通科であっても美術クラブに在籍した学生がほとんどです。全く違う種類の学校から来る場合はもともとデザインがしたかった人でデザインの学校に行けなかった人であることが多い状況です。本校は企画中心の学校であり、造形の方法を教える学校ではありませんので絵の書き方を習いたい人には向いていないと言うことを理解して入っていただくようにしております。描いたり立体にしたりする力はすでに本人が持っていると言う前提で企画を教える学校であると言う内容です。

コースに分けて内容を限った形で教育していた昔に比べて幅を広げた分だけいろいろなことができると言う事ですね。

基本としては工芸、二工芸の生徒のためにあるカリキュラムであると言う事ですね。

->

次の学年等は工芸、二工芸の割合がもっと増えることとなります。私どもとしましては商業の科目内でデザインを習った学生がやってきてもマーケットインの考え方で勉強できるため歓迎です。過去に扇町商業などからやってきて現在活躍している卒業生がおります。その会社に引っ張られる先輩に引っ張られる形で5人ほどデ研生が雇用され、企画営業と言う形で新しい取り組みをし会社を引っ張っている状況です。最近はCIも含めて経営面に関しても提案できる内容になってきていると言うことでした。

このようなカリキュラムだといろいろやりたい学生にとっては良い内容ですね。

->

しかし就職が決まればもうこの辺で結構と言う傾向があります。

デザインは奥が深いのでもっとやりたくなるのが普通だと思いますが。卒業制作と言うものがあるのでしょうか。

->

課題研究がそれにあたります。プロジェクトの中に課題を見つけて深めていくと言うものです。表現が先立つ人は表現の先に依頼があるのかを見つけるようにしています。コンゴにスーツを持ち込んだ学生はその例です。

あれば理想的な制作の仕方でしょうね。

->

そうですね。何か見つけた学生が機材がないとか言うのにやりくりをして揃えてあげるのが今までのスタイルでした。

今年だけの傾向なら良いのですが。

この学校で制作したデザインを持って社会に出るとどうなるか知りたいと思います。

->

課題研究としてはそのような方向を想定しておりまして本人が言い始めるのを待っている状況です。問い詰めすぎると学生が引いていって授業にもこなくなる傾向です。

私はよくやっているように見えますが講師の先生はどのようにおっしゃってますか。

->

2種類に対応が分かれるようです。講師をお辞めになる場合と続けていただける場合です。学生がそのように反応しているようです。学生の反応が敏感過ぎるようです。

昔と比べると今の方が学生が自由にやっているように見受けられますが。

->

今の形の方が学生たちがもっと伸びる感じがします。昔のスタイルであれば一定のところまで止まったように思います。よくやっているとは私は思います。1つ気になる傾向があるとすれば今すぐ絵にしてほしいと言う要求に応えるスピードが遅くなっていると言うことです。これは特別に訓練する必要があるかもしれません。就職の時にもサムネールやスケッチをたくさん見たいと望まれます。小さい絵の方が能力に現れやすいと考えられているようです。しかし学生たちはアイデアスケッチを大切に取っておく癖をつけておりません。

工業教育で言う箇条書きレポートのようなものですね。デザインの世界ではアイディアスケッチを見せると言うことでしょう。

->

30周年の大橋先生の言葉にもありましたようにまず手で表現することに大きな意味があります。コンピューター環境が整っていると言うご指摘もありました。本校では自分のノートPCを徹底的に使いデザインを進めますが、そのための環境整備がなされていると言うご指摘です。工芸高校と第二工芸高校の出身者が多いためもっと連携を深めていく方向で考えております。高校生にとっての単なる選択肢の1つではなく、もっと深い連携を考えております。そのことで力不足の面もカバーできると考えます。同じ敷地にありながら時間割も違うことから連携は難しいですがお互いが高めあえる連携を進めたいと考えております。「頑張る先生」で連携を深めるプログラムが作れないかを模索します。